文化庁委託事業 令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業

障害当事者の劇場・文化施設での芸術鑑賞及び
体験を充実させる施設職員とアーティストの育成プログラム

障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座2024

報告書

はじめに ～本講座について～

この事業は、舞台芸術に関わるさまざまな立場の人が集い、舞台芸術の拡げ方を考えるための場として、文化庁「令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業」の委託を受けて実施した講座です。2年目を迎えた今年度は、オンライン講座と上映会を通じて、障害当事者との創作現場で必要な視点や考え方などを学ぶ「入門編」と、障害当事者との文化芸術活動に取り組む全国の福祉施設の視察や専門家へのヒアリング、そして受講者自ら企画を立てるグループワークからなる「企画実践編」の2部門を開講しました。

この冊子は、事業全体についてまとめるとともに、受講者や事務局が考え、議論したプロセスを記録・アーカイブし、共有することを目的として作成しました。

講座の受講対象者である劇場・文化施設のスタッフ、制作者やアーティスト、福祉施設職員など、障害の有無に関わらず舞台芸術に携わる全ての人たちが事業に取り組む上で、活動のヒントやネットワークを広げる一助になりますと幸いです。

もくじ

本講座の流れ …… 02

入門編 …… 03

合理的配慮ってどんなもの？ 舞台芸術をひらくための考え方 …… 04
オンライン講座「合理的配慮ってどんなもの？ 舞台芸術をひらくための考え方」レポート

「未だ見たことのない美しさとは？」障害のある人の創作活動について考える …… 05
「障害のある人の創作活動の現場で起こる実態とその創作環境、
周囲の関わり方、障害のある人が表現にかける思い（上映会）」レポート

社会課題の解決ではなく、いかに変化を生み出せるか？ …… 06
オンライン講座「芸術文化の価値とは?アートとケアの可能性を考える」レポート

幸せの追求と社会の変革。福祉と芸術の役割を問い直す …… 08
オンライン講座「芸術で何ができる?福祉施設の実践」レポート

劇場は普段出会わない人が、芸術文化を介して、新しい関係を築く広場 …… 10
オンライン講座「劇場に来てもらうには?地域とつながる実践」レポート

企画実践編 …… 12

受講者プロフィール …… 13

視察研修とヒアリング …… 14

受講者対談① わたしも、あなたも大切にしながら一緒にいるために。舞台芸術と福祉と生活の共通項 …… 16

受講者対談② 「好き」「やりたい」という熱を共有できるか？障害とアートの企画づくり …… 17

受講者対談③ 目の前にいる個人と個人で場を紡ぐ。福祉とアートと地域のこと …… 18

企画発表会 …… 19

グループワーク成果報告 …… 20

企画監修者より …… 22

事務局より …… 23

ディレクターより、本講座に寄せて …… 24
街を歩き、地域を知り、当事者と対話する。
多様な人が協働する未来を描き、これからの舞台芸術の場の創造性を高めるために
DRIFTERS INTERNATIONAL 理事／株式会社precog代表　中村茜

クレジット …… 26

障害のある人と考える
舞台芸術表現と
鑑賞のための講座2024

本講座の流れ

障害のある人との創作現場で大切な視点を学ぶ入門編と、芸術と福祉を通じた地域社会のあり方について学び事業企画と発表を行う企画実践編の2部門を実施。

入門編講座 ← 企画実践編の受講者は基礎講座として受講 **企画実践編**

2024年 8月

オンライン講座① 8/27(火) 19:30～21:30
合理的配慮ってどんなもの？ 舞台芸術をひらくための考え方
講師 飯野由里子　東京大学大学院 教育学研究科附属 バリアフリー教育開発研究センター 特任教授

9月

上映会 9/27(火) 神戸文化ホール（交流プログラム）
旅する身体 ～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～
障害と創作について考えるきっかけとなる
ドキュメンタリー映画鑑賞と交流プログラム

9/8(日) 24:00 申し込み締切

オリエンテーション（オンライン）9/25(火) 19:30～21:30

キックオフ
神戸で行われる上映会に参加します。
上映会前に対面によるキックオフミーティングを実施。

10月

オンライン講座② 10/8(火) 19:30～21:30（後日アーカイブ配信あり）
芸術文化の価値とは？ アートとケアの可能性を考える
講師 中村美亜　九州大学大学院 芸術工学研究院 教授
ゲスト アサダワタル　文化活動家

オンライン講座③ 10/22(火) 19:30～21:30（後日アーカイブ配信あり）
芸術で何ができる？ 福祉施設の実践
登壇 久保田翠　認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長
樋口龍二　NPO法人まる 代表理事
山口光　認定特定非営利活動法人ボパイ事務局・パフォーミングアーツ担当
進行 長津結一郎　九州大学大学院芸術工学研究院准教授

11月

オンライン講座④ 11/5(火) 19:30～21:30（後日アーカイブ配信あり）
劇場に来てもらうには？ 地域とつながる実践
登壇 恵志美奈子　世田谷パブリックシアター劇場部学芸チーフ
吉川剛史　穂の国とよはし芸術劇場PLAT 事業制作部
田澤瑞季　株式会社precog／まるっとみんなで映画祭inKARUIZAWA 事務局

12月

2025年 1月

グループワーク／企画検討（オンライン）
3～4人組のチームにわかれ、グループワークを行います。障害のある人や支援者、様々な事業を実践してきた企画監修者からのフィードバックを受け、企画をブラッシュアップしていきます。

10月下旬 ユーザーヒアリング研修
障害のある人や支援者とともに事業企画を考える様子を見学するオンライン研修。

視察研修
さまざまなアプローチで地域と繋がり、舞台芸術をひらく活動を行う福祉施設や劇場を視察
- 11/1(金) 特定非営利法人 クリエイティブサポートレッツ（静岡）
- 11/16(土) DanceBox（兵庫）
- 12/3(火) 工房まる（福岡） ゲスト 添嶋麻里（公財）アクロス福岡 事業部 ディレクター

11月～12月 ユーザーヒアリング実践
グループワークでそれぞれ検討する企画について、障害のある人や支援者からフィードバックをもらうオンラインミーティング。

12/23(月) 中間発表
各チームの中間プレゼンテーション。企画監修者や他の受講生からのフィードバックを受けて、企画発表に向けて企画をブラッシュアップします。

1/14(火) 企画発表 プレゼンテーション準備

企画発表会 1/27(月) 中央区文化センター（神戸）
全チームが一堂に会し、プレゼンテーションを実施！
企画監修者だけでなく、ゲストからもフィードバックをもらいます。

撮影：鈴木優

入門編

オンライン講座と上映会

4回のオンライン講座では、障害のある人との創作現場で大切な視点や考え方について、専門家、舞台芸術の制作・企画者、福祉の現場の実践者のレクチャーを通じて学びました。2024年9月27日（金）に神戸文化ホール 中ホールにて行われた、ドキュメンタリー「旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～」の上映会とショートパフォーマンス、交流ワークショップは、障害のある人もない人も芸術分野と福祉分野の両分野を横断して活動する人々が集まる出会いの場となりました。

合理的配慮ってどんなもの？ 舞台芸術をひらくための考え方

講座名：「合理的配慮ってどんなもの？ 舞台芸術をひらくための考え方」
講師：飯野由里子（東京大学大学院教育学研究科バリアフリー教育開発研究センター 特任准教授）
進行：兵藤茉衣（株式会社precog）

「合理的配慮を実践することが、舞台芸術の可能性をひらく…ってどういう意味？」「合理的配慮を行うことで自分の活動するフィールド（劇場や公演など）にどういった変化がある？」という飯野さんからの投げかけから講座がスタートしました。

講義の中では、言葉の定義やその言葉が生まれてきた歴史的、制度的な背景も合わせて解説がありました。例えば、日本語では、“合理的配慮”という訳語が当てられている「Reasonable accommodation」。日本語では配慮は、気遣いといったイメージが強い言葉ですが、この文脈では具体的な変更や調整などの行動のことを指し、心の問題としては捉えないそうです。

「明日以降、合理的配慮と私たちが言う時には、心配りの話ではなくて、一方的に提供側に無理を強いる話でもなくて、互いに合理的な範囲で行うことのできる具体的な調整の話なんだと考えてください」と飯野さんは話します。

合理的配慮は、舞台芸術をどのようにひらける？

講座の中盤、進行の兵藤から舞台芸術の現場におけるバリアや合理的配慮の事例共有も。「劇場最寄りの一番近い出口にエレベーターがない。」「受付が立って利用すること前提の高さで、利用しにくい。」といった物理的バリア、「介助者の分のチケット代も払わなければならない。」「同行援護の手配が必要なので、直前に情報公開されると、手配が間に合わず、行きたくてもけない。」といった制度の障壁、「開演前のアナウンスの内容を知ることができない。」「チケット購入の過程に『パズル認証』があり、代替の認証手段がなく、チケットが購入できない。」と言った文化･情報面のバリア、「はじめて行く場所で緊張すると声がでてしまう。」「後方座席のほうが見やすいのに、『視覚障害のある人は舞台が近いほうが良い』という思い込みで前方座席に案内されてしまった。」といった意識上のバリアなどについて、現場の経験も交えながら話しました。

わたしは、バリアに気づくことができるだろうか？

「バリアというのは単体で存在しているというよりは、相互に結びつきあって、障害者の社会参加を長期間にわたって阻害し、深刻な差別を引き起こしています。ずっと続くことで、二次障害として、メンタルヘルスの問題を抱えてしまう人も多い。にもかかわらず、それによって、障害のある人は心が弱い、といった思い込みが生まれていったりすることもある。」と飯野さんは言います。

「そもそも、私たちの社会は多数派に合わせてデザインされてしまっている。社会環境のデザインの仕方を変えていくことが必要。」「でも、今存在する環境を直ちに、全てバリアフリーにするのは難しい。だからこそ、要望が出た時に、個々の人に合わせた個別の具体的な調整、合理的配慮をすることが必要なんです。」と飯野さんは話します。

「社会的障壁は、多数派からは見えにくい。心地よく暮らせてない人たち、障害当事者の声を聞き、その声を通して、自分たちの社会にある障壁の存在に、まず、気づくことが大切です。」と講義を締めくりました。

提供:日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS　撮影:富田了平

飯野由里子さん講義スライドより

講師 飯野由里子

東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター特任准教授。専門はジェンダー、セクシュアリティ、ディスアビリティ理論。ジェンダーと多様性をつなぐフェミニズム自主ゼミナール（ふぇみ・ゼミ）運営委員。OTD（組織変革のためのダイバーシティ）普及協会運営委員。

上映会

「未だ見たことのない美しさとは？」障害のある人の創作活動について考える

形式：上映会＋パフォーマンス＋交流プログラム
会場：神戸文化ホール 中ホール
出演：ダンスカンパニーMi-Mi-Bi
上映作品：「旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～」（2022年/67分）
アクセシビリティ：音声ガイド・バリアフリー日本語字幕付き ©TBS

撮影:鈴木優

旅する身体って何？ ダンスカンパニーMi-Mi-Biの映画上映とパフォーマンス

神戸市新長田。駅から続くアーケード街の一角にある席数120の小劇場を拠点に、2022年に結成されたダンスカンパニー『Mi-Mi-Bi（みみび）』は、聴覚、視覚、身体に特徴を持つ個性豊かな7人（2024年5月からは5名）のメンバーで構成されています。神戸文化ホールにて行われた、身体的特徴も個性もバラバラなMi-Mi-Biのメンバーに密着し、それぞれの“身体を巡る旅”を記録したドキュメンタリー映画「旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～」の上映会には、神戸市内外から84名が来場しました。

Mi-Mi-Biメンバーも駆けつけ、映画上映の後には、2024年の豊岡演劇祭での上映作品『島〻ノ舞>>（しまじまのまいまいまい）』を元にしたショートパフォーマンスが披露され、会場は熱気に包まれました。この上映会は、企画実践編の受講者の初顔合わせも兼ねられています。

文化施設や福祉施設の職員、また劇作家などのアーティストが共に考える交流会

上映後、実際にMi-Mi-Biによるショートパフォーマンスを鑑賞した観客の皆さんが、どのような感想を抱いたのか。自分の感じたことを言語化し、他者と語り合うことで、鑑賞体験を深堀りしていくための交流プログラムが実施されました。

劇場などの文化施設や福祉施設の生活支援員、また劇作家などのアーティスト、近隣にお住まいで関心を持ってくださった方、障害のある方など、多様な方が交流プログラムに参加。吃音症、高次脳機能障害、うつ病など、それぞれに抱えている事情や背景なども共有しながら、映画やパフォーマンスの感想をシェアしました。

撮影:鈴木優

プログラムの流れ

①自己紹介
名前などの他に「外見の説明」「人称代名詞の指定（she/he/they）」「自分にとって必要なアクセシビリティの要望」「なぜこの会に参加しようと思ったのか」など、自分と他者が居心地良く過ごすための情報共有を行いました。

②グループで感想シェア
3-4名のグループとなり、以下の2つの問いを元に感想を共有しました。
・映画のタイトルとなっている「旅する身体」とはいったい何だったのか？
・Mi-Mi-Biの由来となっている「未だ見たことのない美しさ」とは何なのか？

③全員で感想共有
グループで話し合われたことを、他の参加者に共有しました。

異なる身体をどのように共有する？ ダンス、身体芸術の可能性や課題

参加者からは、「Mi-Mi-Biの映像や上演を見ていると、たとえ車椅子を押していたとしても、支援者／被支援者ではない構造であることが見てとれた。」「「旅する身体」は、他者の身体を経験するようなことを指しているのでは？」「Mi-Mi-Biが目指す表現は、日常では動かさないような部分を動かしていく、体を拡張していくようなことなのでは。日常と非日常の連続性の中に表現があるような。」といった様々な感想が話されました。

様々な身体や障害のある人が集まって作品をつくる時、人によっては医療的なケアやサポートを受けながら、それぞれの事情を擦り合わせて制作活動を行うことが必要です。障害のある人が作品をつくりあげていくことの難しさや課題について、様々な立場の参加者が共に学び、考える時間となりました。

社会課題の解決ではなく、いかに変化を生み出せるか？

講座名：「芸術文化の価値とは?アートとケアの可能性を考える」
講師：中村美亜（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授）
ゲスト：アサダワタル（文化活動家）
進行：篠田栞（株式会社 precog）

障害のある人·子ども·シニア·日本語を母語としない人たち── 多様な人々が芸術活動に参加する取り組みが注目を集めています。そもそも、なぜ、このような取り組みが行われているのでしょうか?芸術と福祉の両分野を横断する取り組み事例とともに、芸術と福祉の親和性や両分野がまじわることで生まれる可能性について考える座談会が行われました。

演劇のフィクションが引き出した、認知症の方たちの記憶と想像力

まずは美亜さんから「文化芸術の価値とは?」というテーマで講義がありました。美亜さんが翻訳した『芸術文化の価値とは何か ー 個人や社会にもたらす変化とその評価』に触れながら、「他者への共感」「変化が起きる状況を生み出すこと」「信頼やネットワーク」「アイデンティティやプライド」「ウェルビーイング」など文化芸術がもたらす価値や評価について解説した後、近年取り組まれている 認知症ケアの場でのワークショップ事例をお話しいただきました。

重度の認知症で言葉でのコミュニケーションが難しい方達に対して、俳優が介入し、フィクションを交えながら共に演劇を行なっていくプロジェクト。「言語コミュニケーションが苦手な人には非言語コミュニケーションが非常に重要になってくる。俳優の説得力のある演技は観る者の想像力や 記憶力を強く喚起します。」最初は戸惑っていた高齢者施設のスタッフも、認知症の方々の普段見られない能力や反応を発見し、これまでに耳にしたことない過去のエピソードを聞くことが喜びにつながり、場の空気が好転したことで、「ケアする側 / される側」という関係性に変化がもたらされたと言います。

「特に課題解決を目指した事業を企画する場合に、なかなか成果が見えないということがあります。ですがそもそも、社会課題を解決するのは不可能と割り切った方がいいと私は思っています。むしろ変化を生む状況を作り出せたのか、ということを、価値として見ていくべきです。」

個人がみえてくると、眼差しや関係性が変わる。表現活動と支援活動の接点

アサダさんからのひとつめの事例は、アーティストとして長年関わってこられた福島県のいわき市の復興公営住宅で展開されてきた「ラジオ下神白(しもかじろ)」。ラジオ番組(ラジオ CD の制作)であり、バンドであり、歌声喫茶。福島第1原発事故後に避難してきた人たちが入居した団地で、様々な背景、思い、状況の中にいる方が参加できるメディアや場を作っていきました。

アサダワタルさん講義スライドより

「今日の話の中で一つ重要なのは、個人が見えるということがあるかなと思っていまして。被災者というひとくくりの形じゃない関わり方をどういうようなアプローチでしていくかが一つ文化芸術にできることかなということ。僕も含めて僕らこのプロジェクトは、ケアや支援って言葉を全面的に出して活動しているわけではないんけど、結果的にちょっと変わった支援活動になるちょっと変わった支援活動がニアリーイコール表現活動になるみたいなことは目指してきたかなと思っています。」

品川区立障害児者総合支援施設「ぐるっぽ」の事例では、アートディレクターとして様々なアーティスト、作り手を巻き込みながら進めたプログラムについて紹介。コラボレーターとなるアーティストは、些細なことであったとしても、利用者の”主体的な何か””生み出してること”を全て拾って、繋げていく。それをダンスに繋げることもあれば、何にも繋がらないこともある。アーティストが入ることで、それまで見えてこなかった別の当事者性に光が当たる瞬間があることが重要だといいます。

受容する力。芸術文化、アーティストはケアの現場で何ができる？

後半の対談では、参加者からの質問も受けながら引き続き対話が行われました。

「ズレているんだけどなぜかグルーブがある状態はすごく僕の好みですね。みんながそれぞれバラバラに否定されずにいる状況を作りながら、でも一つの表現、一つの場になっている状況をどう作るかということは大事だと思ってます。」というアサダさんの言葉に美亜さんも共感を示します。

「表現の活動だけに、表現の瞬間に焦点が集中しがちだけれども、実は目標を見出すことや、作品や成果をより広く社会化する、発表が終わった後にどうしていくのか、どう伝えていくのかというところにもクリエイティビティを発揮する必要がある。そこはアートの人たちの出番だと思う。それから、ケアする人たちを先入観で一面的に捉えないこと。すごいクリエイティブな人だったりアーティスティックな人がいたり、面白いといっぱいやってる人たちいるので、何かそういう人たちと組んだりしていくともっと面白いことが起きていくと思う。」と美亜さん。

芸術文化、アーティストがもつ、想像力によって場を変容させる力。ケアの現場でアート活動をする人たちにとって、たくさんのヒントが詰まった回でした。

アサダワタルさん講義スライドより

中村美亜さん講義スライドより

講師 中村美亜

九州大学大学院 芸術工学研究院 教授。専門は文化政策·アートマネジメント研究。近年は芸術文化の価値と評価、社会包摂、認知症の人との共創的アートに関する実践的研究を行っている。訳書に『芸術文化の価値とは何か』(水曜社、2022年)、編著に『文化事業の評価ハンドブック』(水曜社、2021年)、単著に『音楽をひらく』(水声社、2013年)など。

ゲスト アサダワタル

分泌活動家。アーティスト、文筆家、近畿大学文芸学部専任講師、本と音楽の店＜とか＞オーナー。地域、ケア現場、復興団地等に文化的な方法で関わり、そこに居る人たちと場づくりを行う。これらの経験から得た視点や閃きを本や音楽を通じて発表。博士(学術)。著書『住み開き』(筑摩書房)『想起の音楽』(水曜社)、CD『福島ソングスケイプ』でグッドデザイン賞受賞他。

撮影:平林克己　提供:まえとあと

幸せの追求と社会の変革。
福祉と芸術の役割を問い直す

講座名：「芸術で何ができる?福祉施設の実践」
登壇：久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ）、樋口龍二（NPO法人まる）、山口光（認定NPOポパイ）
進行：長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）

福祉施設でも文化芸術を取り入れた様々な取り組みが実践されている昨今。舞台芸術活動、地域の劇場･文化施設や地域とのネットワークのつくり方などを知り、芸術文化で何ができるのか、舞台芸術の可能性について考えることを目的に、先鋭的な活動を実施されている福祉事業所の方をお招きし、座談会が行われました。

川柳「課題とは? おもしろいからやってるの 一緒にやる人 大歓迎!」

まずはじめに山口さんの認定特定非営利活動法人ポパイでの活動共有。冒頭、まず気に留めておきたいこととして、福祉とは「幸福」を指す言葉であること、そして、「課題とは? おもしろいからやってるの 一緒にやる人 大歓迎!」という川柳の披露からはじまりました。ライブパフォーマンスで客席から舞台に上がって自然に一緒に踊り出す福祉事業所の利用者の話では、「自分がやりたいんだからやるんだ というような この彼らの衝動性に 私はすごく魅力を感じています。」という山口さん。ポパイの利用者と山口さんで構成する司会ユニット「まなミネぴかりん」は、“ぶっ飛びながらも気配りトークのまなみん、心優しき揉めごと嫌いのミネミネ、そして一応きちんとやろうとする ぴかりん。この3人の司会ユニットで たまにあらわになる崩壊も見どころです。”というキャッチコピーで各方面から司会の依頼が絶えないそう。

山口光さん講義スライドより

アート活動の目的は、価値の変革。

NPO法人まるの樋口さんからは、まるの様々な活動とともに、厚労省の障害者芸術文化活動普及支援事業の福岡県のセンターと九州の広域センターとしての事業についても紹介いただきました。

樋口龍二さん講義スライドより

「今でこそ障害者芸術という言葉が当たり前に聞こえる時代になってきた。そんな中、作品のアウトプットの方法に工夫が必要と考えているんですね。しかし、やはり、（福祉における）アート活動は良い作品を作ることが目的ではなく、作品を披露することで既存の価値の変革するとか新しい価値の創造することだと思うんです。障害のある人たちの役割の創造に繋げていきたい、社会を変えていきたいという思いで、支援センターでの取り組みを行っています。」

支援センターとしての取り組みの中でも、特に文化施設からの要望が多いのは、障害のある人たちとともに文化施設を巡るワークショップだそう。視覚障害、聴覚障害、車椅子ユーザー、知的障害、発達障害など、様々な障害のある人と共に、グループで館内を周り、困りごとやバリアを知りながら、どんな対応が必要か考え、共有し合う実践型の研修です。「いま文化施設も、合理的配慮が義務化されて、対応を考えているところが多いけれど、座学というよりは、障害のある人たちの特性を知って、当たり前の関係を構築しながら体験して学んでいけることがあると思うんです。」と、実際に障害のある人に出会い、ともに同じ場で考えることの大切さについて話されました。

福祉の仕事も、文化の仕事も、幸せを追求し、ともに幸せになっていくこと

「皆さんの地域もそうかもしれませんが、ほとんどの人は重度の知的障害の人がどんな人なのかも知らない。それでいて共生社会なんてうそぶいたところで、何も変わりはしない。であるならば我々はとにかく外に出かけて、障害のある人たちと一緒に 我々はここに存在しているんだ ということを見せていく。その活動を仕事だって 言い張ってやっている団体です。」と認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの久保田さん。様々なトーク、イベント、「のヴぁてれび」というテレビ局まで運営する「たけし文化センター」の「表現未満、」「クラブ･アルス」など様々な事例が紹介されました。

「問題行動だと言われる行動をここでは、100％容認して、環境を整える。水をかぶるのが好きな人は、毎日 水をかぶってもいいっていう。やっぱり本人がやりたいことをやっている時の姿 それは本当に幸せそうだし、福祉というのはそういう嬉しそうにしているとか その人が本当に楽しそうに生きる喜びを感じている みたいな瞬間を目撃していく一緒にいて一緒にそれを称え合うのが仕事。」「人が幸せに生きることを追求しているという意味では、福祉も文化も本来そうであるはず。その人が喜びを感じながら生きていく そういうことを我々 福祉職員もそしてスタッフも、共感して、自分の幸せも高めていく そういうのが福祉としての仕事なんじゃないかと思っています。」と話します。

久保田翠さん講義スライドより

信頼と敬意。当たり前の関係づくりから始める協働

福祉と芸術の関係性についてのみではなく、文化やそれを支える制度、行政との連携についてなど、議論が多岐に及んだ後半。文化政策を専門とする九州大学大学院芸術工学研究院准教授の長津さんも「行政や公共文化施設など公的な立場の文化の担い手には、他の分野や領域の人たちとの繋ぎ手になる意識も大切なのではないか」と話します。

トークの最後、久保田さんは「私が感じている、福祉の場に芸術が関わる時に必要なことのひとつに、 信頼というものがあります。今日、トークを聞いてくださった方たちで、信頼が大切ということをコメントしている方が結構いらして、安心しました。」とコメント。芸術関係者なのか、福祉事業者なのか、行政の担当者なのか。立場はともかく、互いの立場や得意を生かし合いながら、敬意を払い、興味を持ち合える関係がつくれるかどうか。参加者からの質問や感想も多く投稿された回でした。

登壇 久保田 翠

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ 理事長。東京芸術大学大学院美術研究科修了。長男の出産をきっかけに2000年クリエイティブサポートレッツ設立。2010年障害福祉事業所アルス･ノヴァ開所。2018年たけし文化センター連尺町建設。2022年ちまた公民館開設。2017年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2022年度静岡県文化奨励賞受賞。

登壇 樋口龍二

NPO法人まる 代表理事。1974年生まれ。1998年、染色会社在職中に「工房まる」と出会い、表現力に魅了され即転職。2007年に法人設立と同時に代表理事就任。表現作品などを社会にアウトプットする企画運営や、サポートする人材育成としてセミナーやワークショップ等を九州／福岡を中心に各地で開催している。2014年に「福岡県文化賞（社会部門）」を受賞。

登壇 山口 光

認定特定非営利活動法人ポパイ事務局･パフォーミングアーツ担当、歌手、パフォーマー。障がいのある人とのパフォーマンスやそのサポート、他団体や地域と連携したアートプロジェクトのオーガナイズを行なっている。ポパイの外では、ちいさなひとたちに音楽を届ける音楽ユニットクジララのうた担当をはじめバンドのボーカルを務め、ミュージシャン、ダンサーなど様々なアーティストとの共演多数。

劇場は普段出会わない人が、芸術文化を介して、新しい関係を築く広場

講座名：「劇場に来てもらうには？地域とつながる実践」
登壇：恵志美奈子（世田谷パブリックシアター劇場部学芸チーフ）、**吉川剛史**（穂の国とよはし芸術劇場PLAT 事業制作部）、**田澤瑞稀**（株式会社precog ／まるっとみんなで映画祭事務局）
進行：兵藤茉衣（株式会社precog）

公共劇場･民間劇場･芸術団体で実施されている、地域との関係の結び方や、劇場公演やイベントへの障害当事者の呼び込み方について、障害のある方と取り組み事業の具体的な実践について伺いながら、劇場と舞台芸術のひらき方について考える座談会が行われました。

普段出会わない人に、映画祭を通じて出会う

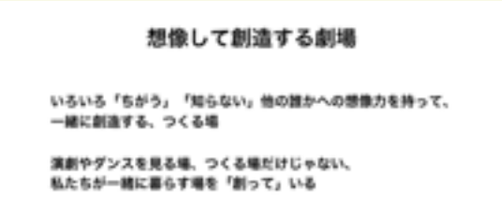
田澤瑞季さん講義スライドより

最初に話題提供したのは、株式会社precogの田澤さん。precogが事務局運営をするまるっとみんなで映画祭についての紹介がありました。この映画祭は子供からシニアまで 障害のある人もない人も 日本語が母語でない人もみんなで集う場を作るユニバーサルな映画祭として2021年にスタート。「出会う」「混ざる」「知る」をキーワードに、障害のある人もない人もともに映画やワークショップを楽しむことができるようなソフト、ハード面での環境づくり、地域の団体や市民チームとの連携によって丁寧につくりあげてきたプロセスが語られました。

公共の文化施設や劇場ホールは、地域に暮らす人人の文化権を守る砦

続いて、穂の国とよはし芸術劇場PLATの 吉川さんから、劇場で実施されている「ワークショップファシリテーター 養成講座」についての紹介がありました。2014年からスタートした「ワークショップファシリテーター 養成講座」は、小中学校や特別支援学校･学級に出向いて行う ワークショップの進行役、ファシリテーターを育成している事業。子ども向けのワークショップ「ワークショップ縁日」を企画実践する講座と、まちを歩き、気になる人や場所を聞き書きという手法を用いて取材し、台本をつくって演劇を発表する講座の2種類を開講されています。

「公共の文化施設や劇場ホールは 趣味や余暇のためだけにあるのではなくて、地域に暮らす人々の文化権を守る砦のようなもの。誰も取り残さない地域作りのための クリエイティブな実践実験の場。」であると吉川さんはいいます。「ちがう」「知らない」他の誰かへの 想像力を持って一緒に創造する、作る場であるために、一緒に地域を盛り立ててくれる人材を育成するということが、ファシリテーター講座の役割。コロナ禍に事業が進行できないとき、改めてスタッフで考えたという劇場の役割。短絡的に収益性を求めるのではなく、地域の創造性を育てる長期的な投資を行い、地域の中での新たな繋がりを育むという目標を掲げています。



吉川剛史さん講義スライドより

いろんな属性の人が集まる広場づくりを意図的に工夫していく

恵志さんは、「劇場は広場」という劇場のミッションのもと、27周年を迎える文化施設世田谷パブリックシアターで一般向けのワークショップや地域連携事業、専門家への育成事業などを行う「学芸」に所属されています。公演事業と違い、学芸事業では、稽古場や学校など、劇場以外の地域の施設等を使いながら、表現のトレーニングを受けていない一般の人々との作品創造を行なっているそうです。「全ての人には語るべきことがある。その語るべきこと、アイディアから集団で演劇をつくる」ことを目標に、「みんながアイディアを出しやすい状況をいかにつくるか」を 試みているそうです。

「人は自分に似ている人と群れやすく、誰か他の人の意見を聞いてるつもりでも、自分と似た考えの 誰かに確認を取っているだけ ということも多いものだと思います。そういった意味では人は常日頃、自分とは違う人に向けて小さな差別や排除や無意識に選択しているともいえます。昔ながらのコミュニティがもはやないこの社会で、特にあらゆる人が住む東京では自分に近い人だけを探し出すことも可能です。いろいろな人が集まる広場は自然発生的には起こり得ません。だからこそ、劇場がやるべきことは、意図的にいろんな属性の人が集まる広場づくりを行うことのではないかなと思っています」という恵志さん。都営の都営下馬アパートで展開されている、「極楽フェス」について紹介されました。

恵志美奈子さん講義スライドより

繋がっていける人と繋がると、自然と道がひらけてくる

後半の対談では、「興味関心もさまざまな地域の人同士が一緒になるプロジェクトでどうやって信頼関係を築き、コミュニケーションしているか」「そもそもアートに興味のない人たちにどうやってその魅力を伝えればいいか」「予算やリソースがない中でどうやってプロジェクトを進めている?」といった地域プロジェクトにおける課題について、それぞれ対話をしていきました。

例えば、丁寧に地域の人に聞き書きやインタビューを行い、互いを知り合っていくこと、劇場やイベント自体に足を運んでもらい知ってもらうことで信頼関係を築きやすくなる。「意図して頑張るというよりは、頑張る気があるのは伝えるんだけれども、なんとなく 繋がっていける人と繋がっていくと広がっていく、というような感じでことが起こっているのかな とに思います」と恵志さんは言います。

予算やリソースに限りがある中でも、「自分が何をやりたいと思っているか」が出発点になれば、ハード面だけではなく、ソフト面の打開策が自然と見えてくる。完璧を求めすぎずに、積み重ねていくことが、地域のプロジェクトにおいて何よりも重要なことであるということ、など3名のお話には共通項がたくさんありました。

登壇 恵志美奈子

世田谷パブリックシアター劇場部学芸チーフ。東南アジアとの国際共同制作プログラムや人材育成プログラム等を担当後、世田谷パブリックシアターの市民参画演劇プロジェクト“地域の物語”を担当。2021年度からは世田谷区下馬地区の福祉法人や町内会等と連携し、地元コミュニティの多様性や他者を知ることを目的にしたアートフェスティバル“極楽フェス”を都営下馬アパートで開始。

登壇 吉川剛史

穂の国とよはし芸術劇場PLAT 事業制作部。社会人を経て、座･高円寺「劇場創造アカデミー」に入学。社会と演劇、地域と劇場の関係性を考え制作や劇場運営について学び、2013年より、愛知県豊橋市の公共劇場「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」で勤務。「大道芸inとよはし」「ワークショップファシリテーター養成講座」「プラットが学校へ。」「市民と創造する演劇」「舞台手話通訳付き公演『楽屋』」「視覚･聴覚に障がいのある方対象のPLAT劇場ツアー」などを担当。

登壇 田澤瑞季

株式会社precog ／まるっとみんなで映画祭事務局。日本女子体育大学舞踊学専攻を卒業後、助手として勤務（2018～2021年）。2021年4月にprecogに入社し、まるっとみんなで映画祭、TRANSLATION for ALL2023、EPAD × THATRE for ALLなど多様な観客を想定したインクルーシブな場づくりをする事業を担当。

撮影:阪下滉成

企画実践編

視察研修とグループごとの企画発表

さまざまな方法で地域と繋がり活動を展開する福祉施設や劇場を見学する視察研修と、障害のある人や支援者と対話しその内容を企画に反映するグループごとの企画立案を行いました。企画立案では、受講生それぞれの活動領域で実践できる企画（ワークショップやイベントプログラム）が発表されました。

企画実践編 受講者

Aグループ

佐藤令奈 舞台制作者

コーディネーター

地域の多様な人々と舞台芸術の場をつなぐ役割に従事する傍ら、海外にルーツを持つユースのキャリア教育に携わる。多様な人々に場をひらくことを模索したく、本講座に参加。

宮本晶子 舞台制作者

舞台芸術の制作者・アクセシビリティコーディネーター

富山市、水戸市の公立文化施設勤務を経て、2019年より合同会社syuz'gen所属。

写真撮影:菅野恒平

も アーティスト

ダンスカンパニーMi-Mi-Bi メンバー

2021年に治療の難しい病気への罹患が発覚。2023年ダンスカンパニーMi-Mi-Biに参加。想定より余命が長くなっていくことと対峙するなかで、本講座に参加。

佐藤綾野 劇場・ホール職員

劇場・ホール職員

新国立劇場研修部職員として舞台芸術に関わる。2019年より2021年のアメリカ大学院で、障がいのある子どものアクセシビリティ向上につながる教育プログラムを研究。

Bグループ

阿部藍子 舞台制作者

パフォーマー・企画／PANCETTA

北海道在住。道内外のアーティストが交流しながらお互いの素敵に気づき合えたり、こどもたちと一緒に何か面白いことをする企画に関わったり、やったりしている人。

綾門優季 アーティスト

アーティスト

富山県出身、劇作家。2011年、キュイを旗揚げ。2021年度より日本大学芸術学部演劇学科非常勤講師。天災・人災に翻弄される人々の様子をモチーフとした戯曲を執筆。

小嶋芳維 福祉施設職員

社会福祉法人みぬま福祉会 生活支援員

重い障害のある人たちの生活介護施設で、アート活動や生活の支援を行っている。同法人が運営するギャラリー兼アトリエ「工房集」で展覧会企画や、作品制作のサポートに従事。

中山恵理那 劇場・ホール職員

劇場・ホール職員

事業課で音楽・ダンス公演や地域連携事業等を担当。

Cグループ

伊藤礼子 劇場・ホール職員

（公財）堺市文化振興財団職員 / 音楽家

三重県生まれ。幼少期から音楽や、母の描く絵に囲まれ育つ。文化芸術を通じた社会課題に取り組む事業に携わる傍ら、トランペット奏者として、関西を中心に演奏活動を行う。

東海林まゆ美 舞台制作者

一般社団法人 Art Philosophy 代表理事

ロンドンスタジオセンター卒業、日本人初英国国立ミドルセックス大学シアターダンス科、学士号取得。テレビ出演多数。ダンスワールドカップ日韓代表。梅花女子大学非常勤講師。

園田佑也 アートに関わる企業・NPO団体等

事業会社勤務

京都のIT会社でバックオフィスを担当。自身が持つ吃音症の経験から、「ふくし」「障害」領域に興味があり、社会生活との接点をどう考えるべきか勉強中。

中西崇将 アーティスト

俳優

舞台を中心に多数の作品に出演。「中西崇将YouTubeチャンネル」を開設し、全セクションを単独で担う一人芝居『他人』『今日のおにぎり、明日のパン。』を配信中。

山中大輔 社会福祉協議会

社会福祉協議会　地域福祉コーディネーター

地域のみなさんと一緒に地域福祉をすすめる仕事に従事。アートプロジェクトの視点を仕事に活かすために勉強中。アート・コミュニケータとしても活動中している。

Dグループ

武田和恵 福祉施設職員

福祉とアートのコーディネーター

美術大学卒業。一般財団法人たんぽぽの家、NPO法人エイブル・アート・ジャパンの東日本復興支援プロジェクトに携わる。やまがたアートサポートセンターコーディネーター。

津野亜由未 福祉施設職員 アーティスト

役者／生活支援員

演劇活動をしながら福祉事業所の生活支援員としてメンバーとさまざまなアートに取組む。近年は即興演劇を用いて、教育現場や精神障害のデイケア、高齢者施設などで幅広く活動中。

長谷川由美 市議会議員 アーティスト

市議会議員／市民劇団の役者

市議会議員、役者。市民活動としてまちの文化史顕彰、観劇サポートに取り組む。演劇や舞台芸術は、誰とでも共にできるものと確信し、文化と福祉の行政の結節点が必要と考えている。

八木智大 アーティスト

アーティスト

吃音の当事者として演劇活動を行う。大学院で自身が出演する舞台作品をフィールドに、マイノリティ当事者が表現するということについて研究中。

佐藤梓 劇場・ホール職員

劇場・ホール職員

KAAT神奈川芸術劇場制作課。劇場プロデュース公演の制作を行う。

視察研修とヒアリング
～地域とつながる福祉施設、アートの拠点～

今回の講座のキーワードとして「地域」そして「対話」「リサーチ」が挙げられる。視察研修では、地域に根ざした活動を行う福祉施設やアートの拠点3箇所を受講者とともに視察し、対話を行った。

視察研修①
2024年11月1日(金)
特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ｜静岡県浜松市

視察研修の第一弾は、障害のある人との対話の前に「まず出会ってみること」を目的に、浜松市の中心市街地にあるクリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）さんが運営する「たけし文化センター」を訪れました。センターの中には、図書館カフェ、音楽スタジオ、ゲストハウス、そして知的障害や精神障害のある人たちが通う障害福祉施設アルス･ノヴァが入っています。レッツさんが「障害福祉施設に、ふらっと観光しにきませんか?」という呼びかけのもと実施する「タイムトラベル100時間ツアー」は、1泊2日で「たけし文化センター」に滞在するというもの。特別な案内はなく、そこにいる人たちとただ共に過ごす中で、訪れた人たちがそれぞれ問いを見つけたり見つけなかったりして持ち帰る企画です。今回は、「タイムトラベル100時間ツアー」で行っていることを1日体験。簡単な施設の説明の後は放任され、利用者と音楽に合わせて踊ったり、絵を書いたり、散歩にでかけたり── おのおのが濃密な時間を過ごした後は、レッツ代表の久保田翠さんや職員の方、受講者たちが円座になって体験と感想の共有と、グループに分かれて企画をディスカッション。企画のディスカッションにはレッツの職員の方々も加わり、さまざまなアイディアをいただきました。

視察研修②
2024年11月16日(土)
DANCE BOXと新長田の街歩きツアー｜兵庫県神戸市

神戸市･新長田の小劇場〈ArtTheater dB KOBE〉を拠点に、コンテンポラリーダンスを中心としたアートプログラムを展開するNPO法人DANCE BOX（以下、DB）では、障害のある人や国籍の違う人、地域の人たちとつくる事業が多く展開されています。劇場と地域の関係づくりやネットワーキングの方法に触れるため、「こんにちは、共生社会（ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ）」プロジェクトチーフでもある文さんの案内のもと、新長田にある5拠点を巡り、各拠点の方からお話を伺いました。

リハビリ･訪問介護･保育園など医療･福祉事業を展開する株式会社PLASTさんが就労支援B型事業と併設して運営しているチョコレート店。特別支援学校を卒業した青年が大学生のように青春時期を過ごす学びの場、福祉事業型専攻科エコールKOBE。DBの事業に参加したアーティストが運営する本屋カフェ･空地文庫。パク ウォンさんと趙恵美さんが運営する、朝鮮半島の伝統芸能が学べるスタジオ･長田教坊。車椅子を利用する高齢者から学校帰りの子どもたち、外国人、ノマドの若者など、さまざまな背景の老若男女が出入りする介護付きシェアハウスはっぴーの家ろっけん。どれもDBから徒歩10分圏内にあり、街を歩くなかで思いがけずDBの事業説明で紹介されたキーパーソンに出くわすなど、劇場と街と人の繋がりを体感する視察研修となりました。

撮影:阪下滉成

視察研修③
2024年12月3日(火)
工房まる｜福岡県福岡市

1997年に無認可の福祉作業所としてスタートし、〈野間のアトリエ〉〈多賀のアトリエ〉〈日佐のアトリエ〉の3つのアトリエを拠点に、約40名のメンバーとともに絵画、陶芸、木工を中心とした創作活動を行うNPO法人まる。受講者が2チームに分かれ、〈野間のアトリエ〉と〈日佐のアトリエ〉それぞれを視察しました。視察後は九州大学に移動し、代表の樋口龍二さんから施設での取り組みや、施設の外に活動を広げる企業とのコラボレーション、中間支援事業についてのお話を伺いました。NPO法人まるは、芸術活動を通じて障害のある人の社会参加と自立を推進する厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業の福岡県支援センターと九州ブロック広域センターの運営も行い、福岡県や九州地方で、障害福祉と文化芸術のネットワークを生み出し、障害のある人の活動を支えています。そうした活動の中で出会ったクラシック音楽ホールのアクロス福岡の添嶋麻里さんもゲストとして一緒に視察に同行いただき、劇場での取り組みや樋口さんとの協働事業についても紹介いただきました。その後は、企画立案のためのグループディスカッション。樋口さん、添嶋さんもディスカッションに加わり、企画監修者の長津結一郎さんも駆けつけてくださり、受講者と意見交換しながら、企画をブラッシュアップしました。

撮影:長末香織

ヒアリング

グループごとに、企画する事業の参加対象となる人や支援者と対話し、その内容を内容を元に企画を検討するため、ユーザーヒアリングを11～12月に実施。企画概要が定まらない中でも、問いを設計し、当事者と話すことで、企画を深める機会となりました。

ユーザーヒアリング研修 **たんぽぽの家のみなさま**	企画実践編受講者全員を対象とした「ユーザーヒアリング」を学ぶための研修として実施。重度の障害のある人を含む演劇チームHANA PLAYのメンバーに対して、演劇の制作者がインタビューする様子を見学。障害のある人との対話について考えた。
ユーザーヒアリング｜Aグループ 放課後等デイサービスこぴあクラブ **第3こぴあクラブ見学** **丸目香耶さま、石川由加さま**	親子向けの企画を検討していたAグループ。障害のあるお子さんとその親とのコミュニケーションの間にいる放課後等デイサービスの職員の方を通じて、施設に通われているお子さんの保護者へのヒアリングを行った。また、施設見学も実施した。
ヒアリング番外編｜Aグループ **医療的ケア児の保護者 福本さくらさま**	親子を対象とした企画を検討していたAグループ。医療的ケア児のお母さんにオンラインでヒアリングを行った。
企画実践編｜Bグループ **NPO法人リベルテのみなさま**	千葉県市川市で地域住民とともに居場所づくりを検討していたBグループ。企画によって生み出したい状況（街に開かれてること、障害のある人がゆるやかに外とつながり穏やかに過ごしていること）に近い状況にある長野県上田市のNPO法人リベルテのメンバーのみなさんにヒアリングを行った。
ユーザーヒアリング｜Cグループ **学生劇団「いと」～Italento～ 勝瀬ほのかさま**	吃音者による演劇企画を検討していたCグループ。学生ミュージカル劇団で活動を行う吃音当事者の方にヒアリングを行った。
ユーザーヒアリング｜Dグループ **廣川麻子さま**（NPO法人シアター･アクセシビリティ･ネットワーク） **山崎有紀子さま**	あらゆる人を対象に新しい盆踊りイベントを検討していたDグループ。知的障害･発達障害･精神障害･肢体不自由の方については、受講者の身近にいる障害のある人にヒアリングをしたが、受講者のネットワークではなかなか出会いにくかった聴覚障害のある方にヒアリングを行った。
ヒアリング番外編 **可児市文化創造センターala（アーラ） 半田将仁さま**	あらゆる人を対象に新しい盆踊りイベントを検討していたDグループ。参考事例として「みんなのディスコ」が話題にあがったことから、事業担当者にお話を伺った。

受講者対談①

わたしも、あなたも大切にしながら一緒にいるために。舞台芸術と福祉と生活の共通項

宮本晶子
舞台芸術の制作者
アクセシビリティコーディネーター

佐藤令奈
コーディネーター

── 今回の講座に参加した動機やきっかけを教えてください。

宮本 保育園の時に仲が良かった子がいて、今思えば重度の自閉症だったと思うのですが、一緒に小学校に上がれなかった理由が当時の私にはわからなくて。養護学校の存在は中学生になるころに知ったものの、どうして別々の教育を受けないといけないのか納得できなかったんです。そんな体験がきっかけで、大学では特別支援学校の教諭になるための勉強をしました。違う文脈で舞台芸術に出会って、教育実習にアートの要素を取り入れてみたりするようになり、芸術分野と教育の相互作用について考えるようになっていきました。それから障害のある人と芸術文化のプログラムに携わる機会が増えて、この講座のテーマにもつながるようなことが、私自身にとっては、ライフワークになっています。

佐藤 私は、舞台芸術の仕事に関わりを持ち始めて1年ちょっとくらいで、前職はIT関係でした。今は、まちづくりと連動した演劇祭に関わっていて、その現場で、アクセシビリティへの取り組みにも関わりはじめたこともあって、この講座で学んでみたいと思いました。それから実は学生時代に教職課程で実習に行った時に、医療的ケア児と1週間関わる機会があったり、放課後デイでアルバイトをしていたこともありました。その施設は利用している中高生のためにスタッフがライブを主催する活動をしていましたが、当時の私は、障害のある人のアートの鑑賞機会が不十分であるということも知らなかった。今回この講座を受講する中で、当時のことも色々と思い出しました。

── 福祉的な場と舞台芸術の親和性はどのようなところに感じますか？

宮本 舞台芸術って懐の広い場所だなと思うんです。確立されていない世界だからこそ、世代や障害のあるなしの垣根を超えられるし、自由に設定できるのが強みだと思います。舞台芸術のクリエーションって、人と人が対峙して、ぶつかることも、避けて通れないコミュニケーションですよね。障害のある人とのコミュニケーションでも同様のことが起きます。何かを作るために、一緒に超えなきゃいけない壁が現れる。違いをみんなで分かち合い、抱えつつ、同じものに向かうというプロセス。それって、自分たちが生きていく上でも重要なことだと思うし、私はそこにずっと興味があります。

佐藤 私は、海外にルーツのあるユースのサポートをしていますが、今の宮本さんの話との共通点があると思います。多文化共生の文脈でも「背景が違う人同士がどうやって交わっていけるのか?」「日本の社会がどう出会っていくか?」ということを考えていく必要がある。フィジカルに、時間と空間をともに過ごすことはとても大切。実生活にも近い感覚があります。

宮本 確かに、一緒に作ることは、実生活と似ているかも。日本の社会構造上、分離されていて、出会わない人たちがいる。ケアのために分けた方が良いという福祉的な視点や文脈も理解してはいるけれど、違う人同士が同じ社会で生きていくためのヒントが、舞台芸術の「一緒に作るプロセス」に、あると思います。

── 背景の違うメンバー同士でのグループワークで印象に残ったシーンは？

佐藤 放課後等デイサービスこびあクラブの視察に、グループのうち3人が一緒に行けたことは、その先一緒に企画をかたちづくっていく上で大切な時間になりました。メンバー同士も、自分の状況や関心、原体験をよくシェアしていたし、違いを開示しあって信頼性を高めていたところもあったように思います。

宮本 子育て中で、企画にどこまでコミットできるかが不安だったのですが、事務局もチームのメンバーの皆さんも柔軟で、子どものいる私の参加方法を一緒に考えてくれました。オンラインの会議をしても常に“特別ゲスト（こども）”が登場して、プリキュアの話が挟まれたりするような状況でしたけど…。それもひとつの特性かも。

佐藤 宮本さんから子育ての実体験のシェアをしてもらえたことは、私たちのグループにとって重要でした。ワークスタイル、ライフスタイル、生活が違うメンバーで、それぞれの生活をシェアしながら、「無理しない!」を合言葉に活動できたことはとても良かったです。これから先も一緒にやれたらいいなと思っています。

受講者対談②

「好き」「やりたい」という熱を共有できるか？障害とアートの企画づくり

武田和恵
福祉とアートのコーディネーター

中西崇将
俳優

── 今回の講座に参加した動機やきっかけを教えてください。

武田 私は、厚生労働省の「障害者芸術文化活動普及支援事業」で支援センターを務める「やまがたアートサポートセンターら･ら･ら」のスタッフで、普段から、福祉と芸術文化の現場をいかにつなぐか、という視点を持って活動しています。この講座の視察研修先が魅力的だったことと、参加者同士も交流しながら学んでいくという形式に惹かれて受講を決めました。

視察研修の新長田の街歩きが特に面白かったですね。日々いろんな問いを立てながら、「自分はどう行動できるのか?」って考えて、活動している人たちに出会えて良かったです。この講座での場の設計はどれも、対話やリサーチすることを大切に組み立てられていました。余白があったから、自分で内容を組み立てる主体性も持てたし、一人で考えるのではなく、他のいろんな立場の参加者の声を聞く時間があったことも良かったです。

中西 私は、俳優をやりながら、5年半くらい、障害のある子供たちが通う施設で働いていました。施設の仕事は、俳優業とはわけているつもりだったのですが、通っている子どもたちが劇場や映画館に行くのが難しいということにも直面して。一緒に作品を鑑賞するためのサポートや作品のアクセシビリティにも興味をもつようになり、この講座が目に止まりました。

うちのグループは「吃音のある人や言葉や話すことについて違和感のある人と演劇を一緒に作る」という具体的なテーマを最初に決めました。吃音当事者のメンバーがいたことがきっかけだったのですが、自分にとっては初めての領域だったので、一から勉強するような感じでした。自分の興味領域、視察研修先での学び、それとは違った視点でグループワークにも同時に取り組む…という感じで、難しいけれど面白かったです。

── 印象的だったこと、視点や価値観が変わったことはありますか？

武田 ユーザーヒアリングを通じて、自分たちの企画の偏りに気づいたり、グループのメンバーの考えがガラッと変わったな、という瞬間がありました。例えば、ろう者の方に「手話通訳をお願いする時の予算確保が課題だ」という話をしたら、「運営側にろう者や通訳者を巻き込んで手伝ってもらうとか、その当事者が主体的に参加できるようにするのも一つの方法だよ」と教えてくれたこととか。

中西 うちのチームは途中、企画が「吃音を克服する･治す」というような方向性にいってしまって、良くないなと思いながらも、そこから抜け出せなくなってしんどかった時期がありました。進めていく中で、吃音の当事者にヒアリングをしたんですが、共通するものはあったにせよ、出てくる話が人によって本当にバラバラで。自分たちが設定していた企画の前提が崩壊していったんです。でも、それがあったからこそ、ようやく話が進んだ感じがします。

個人的に良かったのは、演劇をやっている吃音当事者の方に話を聞く機会があったこと。その人と自分は、お互いに、「演劇が好き!」「演劇って楽しいですよね!」という熱や感覚を共有できたんです。それがあって初めて、企画って成立するんじゃないかってことに気づかされました。

武田 私のグループは、盆踊りの企画をしていたけれど、中西さんが言うように、やっぱり企画者にも、参加する人にも「踊りたい」「人と繋がりたい」という気持ちがあるのが前提じゃないと場は作れないと思います。「誰でも参加できる」だけでは始まらないですよね。そこに集まる人の動機がどこにあるのかをはっきりさせないとブレる。

── この講座は、おふたりの今後の活動に、どんな風につながっていきそうですか？

中西 この講座を通じて出会った人たちは業種や背景が様々でした。物事を考えていく時、これまで自分は演劇側から考えていたけれど、これからは、自分とは違う視点を持った仲間に相談できる関係が築けたことが何より良かったです。

武田 福祉の現場だけにいると、考えが固まりがち。この講座は、福祉に関わる人にとっては、そういうクローズドな感覚を社会的な視点で広げたり、異分野の人と関わるといいなと思えるきっかけになるのではないかと思います。

受講者対談③

目の前にいる個人と個人で場を紡ぐ。福祉とアートと地域のこと

小嶋芳維
社会福祉法人みぬま福祉会
生活支援員

伊藤礼子
（公財）堺市文化振興財団職員
音楽家

── 今回の講座に参加した動機やきっかけを教えてください。

小嶋 私は、大学で現代アートの勉強をしていた時に、障害者アートを知ったことをきっかけに、福祉の世界を知りました。友人が精神障害になり、自死してしまった経験があって、それ以来自分自身は作品制作を続けることができなくなったんです。誰でもそうなる可能性のある社会だなと思ったし、障害者アートを通じて、世界について考えるようにもなりました。厚生労働省の「障害者芸術文化活動普及支援事業」という事業で、勤め先のアートセンター集は、埼玉県の支援センターを担っていることもあって、手の届く範囲のニーズに応えるだけではなくて、もう少し広い視野で事業を考えていけるように勉強したいなと思いました。

伊藤 私の場合は、障害のある人との関わりの始まりは、脳性麻痺のある弟でした。それから、母が、三重県桑名市で絵画教室をやっているのですが、門を叩いてくれる障害のある子の親御さんが多くて、受け入れていたので、子どもの頃からずっと、障害のある人が絵を描く姿を目にしてきました。自分が音楽活動をする中で、音楽好きではない人、もっと広い層を巻き込むにはどうしたらいいんだろう?と考えて来たことや、堺市の文化財団で職員をしていて、仕事の方でも社会包摂に関わる機会があるので、実践を通して自分も何かしてみたい、ということも今回の参加動機になりました。

── 印象的だったこと、視点や価値観が変わったことはありますか？

小嶋 うちのグループは、私だけが福祉施設の職員で、アーティストやさまざまな違う背景のある人同士が集まったチームだったのですが、「障害」に対する考え方、人生や生き方が全然違っているんだなと思いました。私にとっての障害のある人は、福祉施設をいつも利用している人たちのイメージが強いけれど、例えば障害者手帳を持ってはいないけれど、生きづらさを抱える方の「障害」について考えている人もいました。

私の活動はあくまでも、「人の幸せの追求」という意味での福祉的活動の中の芸術文化の支援だし、支援する･されるという立場を取り外し過ぎてしまうのも違う気がする。必ずしも、グループのメンバーの中で障害に対する価値観が一致したわけではないですが、自分の仕事の経験などを話し、相互理解を深めていきました。

伊藤 私のグループは、「吃音、あるいは話すことにバリアを感じる人の演劇活動」について考えました。今回確認できてよかったのは、「他の文化事業を企画しているのと目線は変わらない」ということです。障害のある人のための事業という感じはしなかった。グループメンバーに吃音当事者がいて、彼の子ども時代の経験を聞いたことをきっかけに企画が生まれたのですが、知らない誰かよりは、誰か一人のためにと考えることが大切なんじゃないかと思っていたので、メンバーにも最初からターゲットを絞って考えることを提案していました。

── おふたりはお仕事でも「地域」と向き合っていると思うのですが、障害のある人の芸術文化の活動がよりひろまっていくために、どのようなことが大切だと思いますか？

小嶋 地域との連携って、アートにせよ福祉にせよ、一本槍では人は動かないと思うんです。その人を取り巻くさまざまな「つながり」に力を借りていく必要がある。医療、家族、学校の先生…と小さな関わりが増えて、だんだん動くようになっていくのだと思います。

ただ、地域連携といっても切迫した状況が訪れないとなかなか進まないことも多い。たとえば、障害のあるお子さんと暮らす高齢のご家族が倒れて、急遽施設に入所しなくてはならない…というような状況があった時に、障害のある本人の生活やご家族の思いを知っている施設の職員が、思いを代弁して、ご本人のためを考えると本当はどんな選択肢を取るべきなのかを伝えるとか。熱量をもって、心に響くような言葉で周囲を動かしていかないといけない。

伊藤 その地域の中で長く続けられるような関係性はとても大事だと思います。自分の母の絵画教室を見ていると、「その人、個人がどうすれば、創作活動を続けていけるのか?」ということを常に見ている。その場にどうやって一緒に居続けられるのかということを、同じ地域に暮らすご近所さん目線で、考えているなと思うんです。

撮影:鈴木優

企画発表会

一堂に会し、半年間の成果発表

2025年1月27日（月）神戸市区民文化センターにて、半年間の成果発表の会が開催されました。各グループごとに「事業説明会･記者発表会」に見立てたプレゼンテーションの後、質疑応答やフィードバックの時間、全員の振り返りの場がもたれました。

視察研修、ユーザーヒアリング、グループワーク。対話を大切にそれぞれのチームが辿り着いた企画

contact Gonzoメンバー、KYOTO EXPERIMENT共同ディレクターとして活動する塚原悠也さんと一般財団法人たんぽぽの家．理事長の岡部太郎さんが、受講生の企画のひとつひとつに、丁寧に、具体的にフィードバックをしてくださいました。

また、これまで半年間共に企画検討に並走してくださった監修者の長津結一郎さん（九州大学大学院芸術工学研究院准教授）、文さん（NPO法人DANCE BOX 事務局長）、上映会にご協力くださった（公財）神戸市民文化振興財団事業部長の熊井一記さんも駆けつけ、最終成果を見守りました。

これがはじまり。それぞれの現場で挑戦は続く。

「どの企画も実施して欲しいものばかりで、熱量が見えた。」と長津さん。受講生からも、今回の企画を何らかの形で実現していきたい、続けていきたいという声が上がりました。

熊井さんは、「舞台芸術には、同じ空間にいろんな人が集まって、その中で心が動いたり、知識が共有されるというような場の力がある。劇場は引っ越せないので、地域にひらいていくということが重要になるけれど、それも簡単ではありません。こういった皆さんのプロジェクトが実現すると、劇場の役割も広がっていきそう。」と話してくださいました。グループを横断した交流、意見交換も行われ、半年間の講座が締めくくられました。

Aグループ　医療的ケア児と養育者のためのアートプロジェクト

医療的ケア児をサポートできるアートプログラム運営者、ボランティアスタッフを育成する「医療的ケア児等支援者養成研修」や医療的ケア児と一般参加者とが協働する「クリエーションプログラム」、家族などの養育者が日々の記憶や感覚をテキストにしたり、パフォーマンスに落とし込んでいく「養育者向けプログラム」など、医療的ケア児と家族が家庭や学校、療育や病院以外に時間を過ごすことができるサードプレイスをつくることを目指した一連のプログラムを企画。

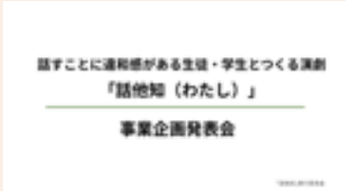
一般の人々と医療的ケア児の交流機会を増やすとともに、各地域の医療的ケア児の支援組織や専門家と連携できる体制を徐々に拡大するプロセスを設計した。Aグループのメンバーの地域から実証実験を行い、取り組みを拡張していくプロセス、予算まで具体的に発表した。

Bグループ　障害者雇用×就労支援継続事業所×アーティスト研修

「誰もが病気になったり、障害のある人になる可能性はある。手帳のあるなしではなく、グラデーション、グレーゾーンに焦点を当てたい。」とした上で、障害者の「働く」ということにフォーカスし、グループメンバーのひとりが暮らす、千葉県市川市を舞台に、企業との連携、障害者雇用の課題に対するアプローチなどを発表した。

実際に市川市でフィールドワークを行い、市川市の課題、環境、観光、文化的資源などにも触れた上で、さまざまなアートという手段を用いたアイデアフラッシュを出していった。アートという手段を通して、普段言えないことや感じている障害をオープンにしやすくなるのでは?と考えていった、そのプロセスを発表した。

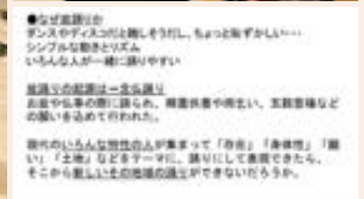
Cグループ　当事者や話すことに違和感がある 中高生・大学生とつくる演劇「話他知（わたし）」



堺市を舞台として、「話すことで他人とともに自分を知る」というコンセプトで考えられた演劇のワークショップ企画。話し言葉が滑らかに出てこない発話障害である「吃音」当事者や話すことに違和感がある方の生活体験の聴き書きワークショップとそれに基づいた脚本による演劇発表を行う。

メンバーのひとりが吃音当事者で、その経験や辛かった体験について他のメンバーが共感したところから、企画のテーマが絞られた。「吃音や話すことに違和感がある人も、言葉による表現を諦めなくていい。」ある意味で、言葉に縛られる演劇だからこそできる場を目指す。

Dグループ　みんなでつくるシン・盆踊り



障害のある人も、ない人も誰もがアクセシブルな盆踊りをつくる企画。日本人にとっては馴染みのある「盆踊り」をモチーフに、地域の社会福祉関係の法人、行政、文化財団、盆踊りをやっている自治会や地元企業、教育委員会などを巻き込んだ展開を企画した。

都市部のベッドタウンとして、新住民が増え、地域とのつながりが希薄になっている神奈川県茅ヶ崎市を舞台に、年齢や国籍、障害の有無によらず、さまざまな人が盆踊りを通して、一緒にクリエイションしたり、集い交流する場を創出する。日常で出会うことがない人や文化と出会うことを通して、多様な価値観を受け入れられるようにすることを目指す。

撮影:鈴木優

企画監修者より

障害とアート、社会包摂事業などに携わる各分野の専門家に依頼し、本講座の監修役、受講者の相談相手として本講座に並走いただきました。講座を終えて、監修者のお二人に講座の総評をいただきました。

長津結一郎

九州大学大学院芸術工学研究院准教授

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なっているほか、ワークショップに関する教育、演劇・ダンスのマネジメントやプロデュースにも関わる。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（九州大学出版会、2018年）

今回の講座で計画された実践に伴走し、障害のある人が参加する企画を行ううえで、いくつか重要なポイントが浮かび上がった。例えば、ワークショップの出入り自由性や多様性を担保するためには、プログラムの柔軟な設計が求められること。企画の熱量を他者に伝えるためには、関わった人々の思いやプロセスを共有する方法を考える必要があること。ワークショップで生まれる作品が障害当事者自身のドキュメントともなる場合には、それをどのように提示すれば本人の主体性が保たれ、かつ多くの人に伝わるものとなるかを慎重に考える必要があること。地域における文化の担い手と協力し、出入り自由な、その地域ならではのイベントを創出する際には、既存の枠を超えた新しい形を模索する視点が求められること。

ただ、このように考え出された企画や、そこからのポイントだけが重要であるわけではない。受講者たちの高い熱意のもと、今後も引き続いていくことが期待される横のつながりが築かれたことが重要だとつくづく感じる。全国各地に共に赴き、同じ土地の同じ風景を共に感じ、共に語り合うその光景は、提案された企画そのものだけでなく、その先にある未来に向けた光として輝いているように見えた。

文

NPO法人DANCE BOX 事務局長
「こんにちは、共生社会（ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ）」プロジェクト・チーフ

神戸・新長田の劇場「ArtTheater dB KOBE」を拠点に、コンテンポラリーダンスのアーティストの育成事業や、障がいをもつ人や国籍の違う人・地域の人とつくる事業を展開。ダンスと身体、表現と社会、人と地域と劇場が出会い拡張する現場を考え続けている。障害者との活動は、「循環プロジェクト」（～2012）を経て、現在はダンスカンパニー「Mi-Mi-Bi」「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」にも伴走中。

表面的に企画をしつらえるのではなく、根本から考えるところに重点を置いていたみなさんの姿が印象深かった。きっと、企画提案に至るまでのグループ内での濃密な対話やリサーチ、他グループの進め方や視点など、どの段階でも学ぶことの多い時間だっただろう。「講座」という形はとっても、一人では実現しえないことを、仲間と共に考える場。その出会いは、これからの社会を動かす動力になっていくと思う。

初対面の人と企画をすすめるのは本当に難しい。仮説であれ、何かしらの理由と必然が必要があってはじめて、「じゃぁ何ができるかな」、ということになる。さらに、遠距離で主なやりとりがオンラインだったことのハードルも高かったはずである。

しかし、提案された企画は「こんな企画を待っていた」と思えるものが多かった。今後、その種を個々の現場で発展・実現できるならなお嬉しい。今年度の企画実践編は、神戸に来ていただくことが多く、私が関わるアート、まち、人／組織のつながりの一例も見ていただけたように思う。私自身もより深く各グループの発表のなりたちを共有できた。今後も皆さんと情報交換（や雑談）をしながら、豊かな社会のありかたを一緒に考えていきたい。

事務局より

兵藤茉衣 事務局／プロデューサー

障害と芸術文化に関わる事業に携わるなかで、理解していたはずのものがそうでなかったことに気づく瞬間があります。まさに自分の価値観や認識が揺さぶられる瞬間。本講座を通じて、その驚きや発見を共有できる仲間が多いほど、学びは深まり、広がっていくと実感することができました。同時に、対話を重ねる中で、お互いの認識のズレに気づくことも多く、もどかしくも重要な「問い」に満ちていました。

例えば、「障害者」と言ったとき、それは誰なのか？　障害者手帳の有無に限らず「生きづらさ」を抱える人と捉える方、自分が「生きづらい」ことに気づいてない人も含まれるのではないか？ という方も。また、「障害者だという偏見で自分を見られるのが怖い。障害者としてではなく、いち個人として認めてほしい」という切実で胸が苦しくなる意見もあれば、「自分はこんなに生きづらいのに、制度上は障害者としての支援を受けられず、障害者として自分を認めてほしい」というお話も。

対話が深まるほど、それぞれのズレに気づきます。それは「自分はどういう意味でこの言葉を使っているのか」を自問し、まだ言語化できていなかった根本的な部分に向き合う機会でもありました。認識のズレを一つにまとめるのではなく、ズレそのものを大切にしながら、自分にできることを始めていきたいと思います。

星茉里 事務局／スクールマネージャー

「舞台芸術表現をひらく」とはどういうことなのか。芸術をひらくとは何を意味するのか、今回の講座は、改めてその問いを考える機会となりました。

近年、芸術文化の価値を見直す重要性が叫ばれる中で、その解釈や認識は一様ではなく、明確な正解があるわけでもありません。多様な人々に向けた企画、障害の有無を問わない企画が数多く立案されています。しかし、それらの企画は誰のためのものなのか、何を目的としているのか、企画者の自身の視点が絶対ではないということを前提に出来ているか？「見えなく、気づけなくなっていることに気づける余白」を残しておくことの大切さを感じます。

今回の講座では、福祉施設への視察研修を通じて実際に現場を見聞き感じとる機会はありましたが、その経験をもってわかったつもりや、知ったふりになってしまうことへの危うさも一方で感じました。また、企画をつくるプロセスにおいて企画を届けたい当事者へのヒアリング調査の機会もありましたが、個々の声を聞くことで新たな気づきを得る一方で、その時には聞くことができなかったことにも思いを巡らせました。受講者自身もそれぞれが立ち返る場面がもあったのではないでしょうか。私自身も並走しながら振り返る機会が多く、何度もはっとさせられました。

大きな声だけではなく、小さな声にも耳を傾けることを大切に、「舞台芸術表現をひらく」とは何か、そもそもこの講座タイトルでもある「障害のある人と考える」とはどういうことかを問い続け、何かをするにあたってそれが形だけの取り組みにならないよう努めていきたいと思います。

栗田結夏 事務局／スクールマネージャー

企画実践編の最終振り返りの際、「そもそも『障害のある人と考え』られたのか？」という問いが受講者の一人から投げかけられました。その問いに、スクールマネジメントをしていた私自身も考えさせられました。

今回はあまりみない試みとして、ユーザーヒアリング（企画に参加してもらいたい当事者へのヒアリング）を行ないました。企画立案を机上の空論で終わらせず、当事者が企画の中心にいるための重要な第一歩だったと思います。そこから生まれた企画たちは、とても具体的で、想像が膨らむ面白いものばかりでした。

とはいえ講座としての限界はあり、視察研修やユーザーヒアリングで話を伺ったからといって、企画内容を実質的に障害のある人と一緒に考えるた時間はほとんど取れなかったと言えます。だからこそ、そもそも「障害のある人と考える」とは何か？ という根本的で重要なところに立ち返ることができたのは、講座を行なった意義になり得るのではないかと思いました。

特に自分がその障害の当事者でない場合は、社会の当事者として、企画立案者として、どう振る舞うべきか、どう企画を進めていくべきか。言葉でコミュニケーションが取れない当事者とどう共に考えるのか、異なる文化を持つ当事者とどう共有しあえるのか。「障害のある人と考える」ことの難しさと喜びを改めて感じる機会になりました。

ディレクターより、本講座に寄せて

街を歩き、地域を知り、当事者と対話する。多様な人が協働する未来を描き、これからの舞台芸術の場の創造性を高めるために

DRIFTERS INTERNATIONAL 理事 / 株式会社precog代表　中村茜

私は、本事業の運営団体であるDRIFTERS INTERNATIONALの理事であるとともに、アートプロジェクトの企画制作を手がける「precog（プリコグ）」の代表を務めています。2003年に創業し、実験的演劇や舞台芸術のプロデュースを行ってきました。公演先は日本国内だけでなく海外にも広がっています。東京オリンピック2020に向けて、日本財団が主催し開催した「True Colors Festival ―超ダイバーシティ芸術祭―」に関わったことがきっかけで、「アートにリーチしづらい人が身近にいたこと」に気づき、アクセシブルな表現の場をどのように実現することができるのか、舞台芸術の現場で様々な取り組みにチャレンジしてきました。

「True Colors Festival ―超ダイバーシティ芸術祭―」の様子

本事業は、2023年に引き続き2年目の受託をいただきました。この間、民間事業者に対する合理的配慮の義務化の流れなどもあって、劇場や舞台関係者の中でも、意識の変化もあったのではないかと思います。私自身は、2025年9月13日（土）から11月30日（日）に開催される国際芸術祭「あいち2025」のパフォーミングアーツ部門のキュレーターをつとめており、舞台芸術の創作、あるいは鑑賞を届ける上でのアクセシビリティについて、ますます考えている1年です。

2月26日（水）、国内最大規模の芸術祭の一つである国際芸術祭「あいち 2025」の全参加アーティスト60組が発表。障害のあるアーティスト含め、9組とクリエーションを進めている。

この事業の長いタイトル「障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座」の中にもあるように、考えていかなければならないポイントというのは様々です。例えば、障害のあるアーティストとともに舞台芸術「表現」をつくっていくプロセスにおけるバリアの問題もあれば、障害のあるお客さまへの「鑑賞サポート」「チケット購入」「来場案内」についてのこともあります。バリアの種類も、ハード面の課題だけではなく、ソフト面の課題もあり、人により、環境により、複雑で多様になります。誰にとっても完璧なアクセシビリティや保障を届けることはできない。必ずズレがあります。だからこそ、障害のある人とともに考え、実践することが大切ですし、障害者と話すことだけではなく、サポートする側のなか（施設や組織内で）でどう考えているかなどを共有し、マインドを一緒にしておくことがとっても大切だと思います。芯の部分を共有しておけば、柔軟に対応していくことができる。それに尽きるのではないかと思うのです。

また、アクセシビリティについて考えることは、相手への想像力を働かせ、コミュニケーションについて考えることだと思います。同時に、サポートをする側が、障害者の主体性を奪っていないか?ということについても、常に考えておく必要があります。障害のある人が、自ら選択し、主体的に活動する機会を奪わないように。そのためにはやはり、当事者との対話が重要になります。本講座の企画実践編は、対話の場をつくること、当事者から話を聞くこと、実践の場に受講者が自分で足を運ぶことを大切にしてプログラム設計を行っていました。福祉施設に伺って現場でお話を聞いたり、街を歩いて地域と生活と結びつけながら、複雑さを感じ、包括的に考えていくことが何より重要であると思います。

私たち自身の取り組みも、まだまだ過渡期ですが、本事業を通じて出会った皆さんと、ひきつづき、舞台芸術の現場をより創造的に、豊かにしていくためにともに活動していけることを願っています。

企画実践編　新長田の視察の様子（撮影:阪下滉成?）

中村茜

1979年東京都生まれ。2006年株式会社precogの立ち上げに参画、2008年より同社代表取締役。海外ツアーや共同製作のプロデュース実績は30カ国70都市に及ぶ。2012年～2014年、国東半島アートプロジェクト及び国東半島芸術祭（国東半島芸術祭実行委員会主催）パフォーミングアーツプログラム・ディレクター。2019年、True Colors Festival ～超ダイバーシティ芸術祭～（日本財団主催）アソシエイトディレクター兼副事務局長。2020年、アクセシビリティに特化したオンライン劇場「THEATRE for ALL」統括プロデュース。2021年、令和3年度（第72回）文化庁芸術選奨・文部科学大臣賞新人賞【芸術振興部門】受賞。2023年、まるっとみんなで映画祭 in KARUIZAWA 統括プロデュース。2024年、国際芸術祭「あいち2025 」のキュレーター（パフォーミングアーツ）に就任。

文化庁委託事業 令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業
障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座2024

主催：文化庁、一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL
共催：神戸文化ホール（指定管理者:公益財団法人 神戸市民文化振興財団）
企画：一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL
制作運営：株式会社precog
広報：THEATRE for ALL

ディレクター：中村茜
プロデューサー：黄木多美子、兵藤茉衣
プロジェクトマネージャー：星茉里、栗田結夏
広報アシスタント：土屋梨沙、松本綾香
プロジェクトデスク：齊藤実雪

宣伝美術：LABORATORIES
記録写真：鈴木優、阪下滉成、長末香織

【入門編･オンライン講座】
プロジェクトマネージャー：田澤瑞季、林芽生
プロジェクトアシスタント：西多恵子、箕浦萌
手話通訳：瀬戸口裕子、伊藤妙子
アーカイブ映像編集：内田圭
アーカイブ字幕協力：石川佳音

【入門編･上映会】
上映作品：『旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～』（2022年/67分）
出演：ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi（内田結花、KAZUKI、武内美津子、福角幸子、福角宣弘、三田宏美、森田かずよ）
監督：渡辺匠、志子田勇
製作：TBS

ショートパフォーマンス
出演：内田結花、KAZUKI、福角幸子、三田宏美、も、森田かずよ、米原幸
音楽：嶺川貴子、日野浩志郎
衣装：福岡まな実
協働メンバー：中村風太
スタッフ：文、眞鍋隼介、新家綾、池本由樹菜（以上、NPO法人DANCE BOX）
映像：嶋田孝好
手話通訳：久保沢香菜、中村わかな
協力：TBS

【企画実践編】
受講者企画監修：長津結一郎（九州大学）、文（NPO法人DANCE BOX）
企画発表会フィードバッカー：岡部太郎（一般財団法人たんぽぽの家）、塚原悠也（contact Gonzo）

視察研修企画協力：特定非営利法人クリエイティブサポートレッツ、NPO法人DANCE BOX、NPO法人まる
視察協力（神戸）：廣田恭祐（株式会社PLAST）、岡本正（ユニバーサル社会づくり研究所）、小松菜々子 （空地文庫）、パク ウォン･趙恵美（スタジオ･長田教坊）、首藤義敬（株式会社Happy）
視察ゲスト（福岡）：添嶋麻里（（公財）アクロス福岡 事業部 ディレクター）

ユーザーヒアリング協力：たんぽぽの家のみなさん（大西照彦、山口広子、本田律子、河野望、佐藤拓道、大井卓也、中島香織）、放課後等デイサービスこびあクラブ第3こびあクラブ（枝川）のみなさん（丸目香耶、石川由加）、NPO法人リベルテのみなさん、勝瀬ほのか（学生劇団「いと」～Italento～）、廣川麻子（NPO法人シアター･アクセシビリティ･ネットワーク）、山崎有紀子、福本さくら
ヒアリング協力：半田将仁（可児市文化創造センターala）

【報告書】 編集･執筆：篠田栞 校正：箕浦萌 デザイン：内田圭

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
DRIFTERS INTERNATIONAL